

## 食の向こう側に見えるもの

E s s a y

野中 ともよ



## プロフィール

ジャーナリスト 東京都出身、上智大学大学院文学研究科博士前期課程修了。ミズリー・コロンビア大学大学院へ留学。NHKの「海外ウィークリー」等のキャスターを経て、1992年～1996年までテレビ東京「ワールド・ビジネスサテライト」のメインキャスターを務める。中京女子大学客員教授、東京国際交流財団理事、大蔵省財政制度審議会委員など幅広い分野で活躍中。

TOMOYO NONAKA

illustration by  
FURANSOWA FUJII

2000年という幕が開き、やがて2ヶ月が過ぎようとしています。今年は、心ときめく始まりの年であると同時に、20世紀という激動の世紀をしめくくる「ケジメ」とか、ちょっと妙な表現をすれば「オトシマエ」をつけておかなければならない一年でもあると思っています。

もつやめたい、と思つことには、ピリオドを。いつか始めたい、でも、無理だ、と逡巡し続けていたことからは、思い切つてスタートする。

そんな勇気の背中を、曆が小さく大きく押しつけてくれている、そんなふうにも思えます。

皆さんは、どんなふうにも今年のスタートを切られましたか。

世界をあげて、Y2Kがかまびすしく、地震を恐れたりする天災への不安もまた違う、妙な脅えにも似た不安の年末があ

りました。

幸いなことに、大きな混乱はなく、システムはあたりまえのように継続されて新しい20000・1・1の下で動きはじめています。

アメリカでは、あまりにあっけなく無事にコトが進んだので、あの騒ぎは仕掛けられた不安で、ムダ金を使わせようとした陰謀である、と怒る人々も出はじめた、と聞きます。

自分の理解や力の及ばぬ領域であれだけ不安をかきたてられて、石油ストーブだ、即席めんだ、自衛しろ、と言われて身を縮めていたら、なあーんにも起こらなかつた、となればグチのひとつも言いたくなるのが「人の心」かもしれせん。でも、あらためて、何も大きな混乱がなかつたことに感謝しながら、危機管理、リスクマネジメントは、そもそもこういうのだ、と再確認するところです。

電脳世界図のY2Kを率いる本当の意図を知る由もありませんが、『何事も起こらないために努力する』これがリスクマネジメントです。

ぼくには、ニアーンにもカンケーないニアーン、とばかりに我が家のひのくんがひだまりで伸びをきめています。

Y2Kは、大晦日から元日への一夜が大きな問題でしたが、私たちには、もっと大きな危機が、しかも確実に進行し続けている危機があると思うのです。

いのちが、少しずつ悲鳴をあげはじめ

ています。地球というお星さまの懐に抱かれて200万種とも、何千万種ともいわれる様々な生きものたちの中で、たった一種の私たち人類のオカゲで絶滅のみちをたどっていくのちも、様々報告されています。

その責任にも気付く時期です。でも、もっと愚かしいことに、私たちは、自分たち自らの種に対しても、とんでもない刃物と毒をまき散らしはじめています。一番身近な毎日に焦点をあててみましょう。私たちは、毎日、食べます。「食べたものが、30分後のわたしたちになる」と言った人がいました。

「何をどう食しているかが、実は、何をどう、どこで勉強してきたかなんてことよりも、ずっとその子、つまりはその人間をつくる基礎になることだ」ことを、忘れがちだね。」ある栄養学の先生がポツリとおっしゃっていました。

一方で、何十種類の食品添加物を毎日口にするから、今の子供はすぐキレル。母親が手作りオヤツやおカズをめんどうがるのが諸悪の根源だ、という意見。それに対して、食も重要だけれど、キレル状況には、添加物より家族そのものあり方、コミュニケーションや愛の問題がある。甘いものやスナック菓子を目のカタキにしたリ、母親を家事にしばりつけるような発想は危険だ、という意見もあります。

両者ともに部分的に正しく、要はバラ

ンスね、という理解が大多数のご意見ではないかと思うのですが。

いずれにしても、食べる、という行為ひとつとっても、なんと「いのち」の原初からほど遠いロジックがまかり通るようになってしまったのでしょうか。

地球全体の食糧危機という問題認識と、遺伝子操作の種子会社や国家の理論が、一人一人のいのちに対する真摯な検証をないがしろにしている、とは思いません。また「飽食」などという状況を達成し、感謝して謙虚になるどころか、いい気になつて踊っている集団——とりもなおさず、私たち一人一人の日本国民ですが——がこのまま事もなくすごせるはずがありません。

謙虚にいのちを支え、輝かせてくれる「食」のことを、もう一度、知識としてというよりも身体を通して、いのちを育みいたわり合う「家庭」の中で学び直すときではないでしょうか。

「一宿一飯」「同じ釜の飯」。「メシを食う」って行為は、栄養補給のみならず、関係を作る行為でもあるのです。

「同じカマのムジナだね、ワッハッハー」我が家の冬の定番の「ヤサトン鍋」(お野菜トンシヤブ)に集まってくれる仲間Eさんが豪快に笑います。子どももつられて笑います。

子どもの笑顔が、社会の元気の素という事実も、遠く忘れられてきた大切なことだと気が付きます。